

Title	農業の進化
Sub Title	
Author	瀧本, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.10 (1924. 10) ,p.1369(1)- 1386(18)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19241001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本一の時事新報

震火災 後直ちに復興内容益々充實 公正の議論、敏確の記事共に信用絶大なる眞に代表的大新聞の名に背かず

朝刊完 夕刊備

本附録は主筆北澤樂天氏外數氏の努力に成り凸版四六判八頁の色刷漫書にして何れも獨特のものにて奇抜なる諷刺輕き可笑味の間にも自ら或る教示を與へらるゝ處あり好評噴々

其他隨時家庭附録及び隨時附録を附する事あるべし

社報新事時 町錦南區橋京 二十の二

三田學會雜誌 第十八卷 第十號

論 說

農 業 の 進 化

瀧 本 誠 一

農業と云ふ言葉の意味を昔の用語として嚴正に解釋すれば直に消費すべき食料又は製造加工の原料を土地より生産することを云つたのであつて是れが第一の意義である、後には農業に従事するもの、即ち農民たちにふさはしき事業、例へば植林、牧畜、牛乳搾り、又は畜産物の加工及養蠶製絲等の仕事まで包含する様に廣き意義に解せらるゝことになつたのであるが、是が第二の意義である。而して最近には農産物の販賣 (marketing) と云ふのが、最も重大の問題となり、農業に従事する人

々が、自分の生産しつゝある農産物を如何にして市場へ持出し、如何に有利に賣捌き得るかを知らなかつたならば、農業は全然成功の望みなしと云ふ様な趨勢となり、農業そのものが半ば商業化して、商業と同一の經營法に依つて經營せねばならないようになつて來たのである。是れが農業經濟學上商業的農業(Commercial agriculture)なる怪しき熟語すら使用さるゝに至りたる所以であつて、農業の範圍が商業の領域まで侵入して、大に擴張せらるゝことゝなつたのである。即ち今日の農業は此の第三の意義に於ける農業でなければ、經濟的に有利の事業とは認められなないことゝなり、歐米諸國に於ては農村の振興は、農業をしてソレ迄に進むるより外に手段なしとせられて居る所以である。

第一の意義に於ける農業は世界各國何くにも、數百年前より傳來の古き事業であつて、自給自足の生活を營みつゝある幼稚なる國民に於ては、此の農業を主たる職業として、大多數のものは皆之に従事して居るのである。而して此の時代には商工業は未だ少しも發達せずして、一般國民の生活程度は、甚だ低級であつて、唯だ單に自ら耕やして食ひ、自ら織つて着る位の事なりしかば、物好きもなければ、贅

澤もなく、洵に單純なる生活を以て満足して居つたのである。歐洲の或る學者が、農業を專業とする國民は常に貧乏であると云へりしは、全く之が爲めであつたのであらう。併しながら此の時代の農民は其の地位洵に安全であつて、少許の地面を所有して居れば、勿論の事であるが、よし他人の地面を借りて居つても、ソレを一家で耕作して、食料と租税とを收得し、若し餘りあらば饑饉の用意として蓄へ、尙其上にも餘剰があつたならば、ソレを金錢に換へて、多くもあらぬ必需品を買調へるの用に供すると云ふ位の事であつて、其の外には過分の欲望も何にもなかつたのである。故に此の時代の農民は米價などが低廉であつても少しも苦に病まなかつたのである。太宰春臺が經濟錄(卷五)に於て「古代より近世までは、四民の間には米を以て萬事の用を辨じて、金銀を使ふ事は當代の如くにはあらざりし故に、米の價賤くても、米穀豐饒にて倉に滿ちたるほどなれば、士人も農民も困究することなかりし也」と述べて居るのは、其の通りのことであつて、春臺が茲に近世と云へるは、多分元祿頃の事を云ふのであらうが、現に其の頃には世の中は段々と貨幣經濟に移變りつゝあつて、都會の地は大に古昔の律儀なる美俗を失つて奢侈淫靡の風

漸く盛らんとするに至りしかども、農村各地方に於ては尙未だ春臺の云へるが如き朴直質素の生活状態に安じ、米價は非常に低廉にして、兩に一石二三斗乃至一石五六斗なりし時ですら、農民は左程苦痛を訴ふることなかつたのである。

然るに社會の進歩發達に伴ひ、交通々信の便大に開け、著書新聞など盛に普及するに及んでは農村の經濟生活は自然ソレにつれて一變し、昔の如く、耕して自ら食し、織つて自ら着るが如き自給自足のシミたれたる粗野の生活に甘んずること能はず、何れも皆都會に於ける商工業を羨みて、動もすれば其の生活振りを眞似たがるの傾向を生じ、山村僻地到る處漸々と都會化するに至るのである。而して斯くの如きは必ずしも社會の惡現象とのみ見るべからずして、其の實一方に於ては確かに農村經濟生活の向上發達を意味するのであつて、ドツかと云へば寧ろ祝すべき徵候であると謂ひ得らるゝのであるが、ソレは兎も角も、世の中が斯くなりたる以上は、最早農家は昔の様なる原始的の農業では迎も時代の要求に應ずること能はず、何になりと、モット有利の方法を考へて、金目にもものを生産するの工夫をせねばならないようになり、茲に始めて自覺して、祖先より傳來したる單純なる舊式の

農業を改めて、作物の變更、種子肥料の改良、新式の機械を採用するなど、種々の手段を施して、生産の増加を計らねばならないのである。農家に副業なるものが、追々盛んになつて來たのは、此の時代の要求に應ずる自然の趨勢であつて、副業がなかつたならば、農業は到底引合はないのである。否實際に引合はないのではなく、農業自身の生活状態が向上したるが故に、單に舊式の農業に依頼して居つては、進歩しつゝある農村に於ける、多種の欲望を満足することが出來なくなつたのである。

歐洲に於ては史上に有名なる獨佛戰爭(一八七二、三年)後十數年間、引續きて各國何れも農村の衰頹を來し、就中英國の如きは各地方一般に非常の慘狀を呈して、奈何ともすべからざる悲境に陥りたるも、其の當時は商工の勢力旺盛にして農村の利害は全然之を閑却せられ、政治上の保護などは思も寄らざる有様なりしかば、農民は奮然と自覺してアラユル方面に着々と改良を圖り、遂に大に其の効を奏して舊式の農業は殆んど全くその面目を一新したのである。英國農學の大家プロゼロウ氏は此の時代を評し「英國の農業は此の時より俄然と發達して著るしき進歩の實を示し、牛乳搾り、花草果樹の栽培、牧畜の獎勵等がこの新時代の特徴となれり

き(English farming 第三版三八三頁)云つて居るが、同國はこの時分より、第二の意義に於ける農業期に入つたのである。

我が日本に於て前にも述べた通り、元祿年代より漸次貨幣經濟の世の中となり、都會に接近する農村に於ては、全く古風の農業にては時代の進歩に應ずることは出来なくなつたものと見へ、先見の明ある者は往々ソレに氣付いて農業の仕方の変更せねばならないことを唱へて居つたのである。例へば狄生徂徠が其の著政談に於て「百姓は愚なる者にて所にては(所)といふは田舎の在所を云ふ(前より仕來らざることをば)サラリとせぬもの也、是れは地頭より下知して或は桑を植て蠶をさせ、或は麻を植へ、漆を植へ、楮を植へ、惣じて山を立てさせ、何に付けても、地の利を見立て、所の賑ふ様な仕方有るべし」云々(卷二)と云へるが如きは、單純なる舊式の農業にては、最早間に合ないと云ふことをボンヤリとほめかしたるものであつて、流石に慧眼なる徂徠のことなれば、早く此の點に着目し居たるものゝ如し、然れども徳川政府や各藩に於ては未だソんな事に氣付かずして、頑固に此の大勢に逆抗し、所謂の副業の類い農業を妨害するとして、之を禁止し、殊に此の時代に於て全國

一般に盛大ならんとしつゝ、あつた蠶業なども、一切之を嚴禁して、従事することを許さなかつた藩も、少なくなかつたのである。

然れども經濟的大勢の向ふ所は區々たる政策に依つて之を左右すること能はざりしが故に、徳川氏の末年に及んでは、農業は次第に複雑になり、種々の副業現はれ出で、緩慢ながら漸次其の面目を改めつゝ、あつたのである。徳川氏亡びて、明治の世の中となりては、政府は農村に向つて頻りに副業を奨勵し、農民亦一般に之が必要を認めて、アラン限りの努力をなして夫れ夫れ各地方に適應する副業を試みたる結果今日に於ては稍や見るべきの成績を挙げ、之を十數年前の昔しに比すれば、農村の状態は何れも殆んど見違へるまでに改良進歩したることは疑いない事實である、然るに都會に於ける商工業は其の進歩發達特に著しくして、之を農村に比較すれば、彼此甚だしき懸隔あつて、後者即ち農村の經濟状態は、二十世紀の文化の恩澤には全然浴して居らないように感ぜらるゝのである。歐洲に於ても都會と農村とを對比すれば、其の文化の程度は勿論云ふ迄もなく、天淵の差異あること、辯を待たざる所なるも、彼に在つては農業は現在殆んど工業化して、全然その

面目を改め、果樹野菜の栽培等には勿論のこと、畜産の加工業、例へば練乳、バター、チーズ、ハム、鹽豚等の製造が穀作よりは最も重大なる仕事となり、加工製造と云ふことは、農家に欠く可らざる業務となつたのである。然るに我が國はマダ中々それまでに至らずして、僅かに第二の意義に於ける農業の初期に入らんとし、ヤット其の門戸に出入して、半舊半新、何れとも決し難き中間に彷徨して居るのである。歐米に於ては既に農業の本職となつて、重大視せらるゝことが、我が國に於ては副業として比較的輕視せられて居ると云ふのであるから、彼我の懸隔の甚だしきは此の一事でも明かであらう。

我國に於て農家の副業とすること例へば養蠶、製絲、養雞、産卵等の事業を始めとし、茶園を設けて製茶をやり、乳牛を飼つて搾乳をやり、又練乳、バター、チーズ、ハム、ラカン等の如き製造加工は歐米に於ては既に副業どころでなく、農家の最も重大なる本業となつて居るのである。而して我が國の農業も亦斯くの如くに進歩して、米麥が却つて副業となり、只だ僅かに自家の食料用として作らるゝまでに發達したらんには、農業は茲に始めて有利の企業として、經濟的に經營し得らるゝのである。

一體今日我が國に於て、所謂副業が其の眞の意義に於て副業たるの實を失はざる間は、マダ、原始農業時代を脱しない證據であつて、斯くの如き國柄に於ては農業は經濟上より打算して、到底引合ふものにあらざることとは明かである。例へば世界的に需用の廣大なる小麥の如きでさへソレばかり多く作つて居るような國民は如何に其の經營の宜しきを得たりとするも、大した富裕の國民となり得られないことは事實の證明する所である。まして我が國の米の如き、外國への輸出品としては最も不向なるものであつて、而かも其の用途は甚だ單純にして、内國人の飯料の外には矢張又輸出の望みなき日本酒、和菓子原料として消費さるゝぐらいに過ぎずして、豊年に産額が饒多であつても、長く其の儘で貯藏し置くことも出來ず、去りて又大に加工して、廣く世界の市場へ賣出されるものでもなく、又凶歲の場合には、少しは其の品質に差異はあるとしても、接近する未開國より比較的廉價に何の造作もなく、ドシ、輸入し得らるゝが如き品物なれば、如何なる場合でも、到底商品として高き相場を維持することは斷じて不可能であると云はねばなるまい。即ち約言すれば米は世界的に之を觀察すれば、商品としては最も不適

當なるものにして、其の點は小麥よりも尙一層厄介なる代物である。故に今此の商品として不適當なる米を、國民の大多數を占むる農民が、我も彼も競つて生産しつゝあつては、如何にしても生産費以上に相場の上りよう筈もなく、結局一町歩や二町歩の水田を持つて居た所が、金にしたら何程の收得にもならないのである。ソレも若し、せめて四五十町歩乃至百町歩位の纏つたる土地英國で所謂中地主位のものゝを所有して居つて、完全なる耕作法の下に之を經營したらんには、米作にても相當の金儲が出来ないとも限らざるべきも、我國の如き極端なる小農制度の國柄に於ては、農民が米作などを主要の業務として居る間は、如何に勤勉し如何に勞苦するとも、都會の商工業と對等匹敵して同様の金儲を爲さんとするは思も寄らざることであらう。我が國の農民は大した金儲にはならないでも、祖先傳來の米作を固執して、質素節儉を旨とする粗衣粗食の田舎生活に安ずるか、ソレが出来ないとするれば、二十世紀の商品として最も不適當なる米の生産を主要の業務とすることを斷然廢止するか、何れか其の一方を撰まねばならない境遇に陥つて居るのである。世界の進歩したる國々は皆後者を撰んで生産したるものを、其の儘加工

と云ふ程の加工もせずして、直ちに消費するが如きものよりは、加工製造の手續を経て、其の價值を大に増加し得らるべき商品の原料を、主として生産するばかりでなく、其の加工製造の事業までも、農家自ら之に従事するようになり、農業そのものを單純なる食料の生産業となさずして、廣く市場に向つて販賣すべき商品の供給を目的とする重要な企業と認めらるゝに至つたのである。而して我が國の農業も亦最近の趨勢に依つて之を推測すれば、歐米のソレと同一なる發達の徑路を辿りて、次第に企業化せねばならない様になるべきは、略々推察し得らるゝであらう。

然しながら農業が企業化して、從來の如く自分の家庭を主要の得意として、専ら其の需用を満足するが爲めに生産することを止め、廣く世界的の定りなき得意を相手にして、商品を生産製作することが、農家の本業とならば、是非とも段々と大資本を放下して、大仕懸けの大量生産をやらねばならない様になることは、寧ろ當然の勢であつて、斯くなつて、ソレ始めて第二の意義に於ける進歩したる農業の目的を達し得らるゝのである、即ちソツなつて來れば茲に又當然の結果として、一つの

重大問題が起らざるを得ないのである、ソレは即ち農産物のマーケティング(販賣の仕方)の問題であつて、是れが最近農業の最も進歩したる國々に於て、殊に重大視せらるゝ所であるが農業が茲に至りては更らに一步を進めて、企業的なると同時に又商業的となつたのであつたので、今日新らしき意義に於ての農業は、所謂商業的農業即ち余が云へる第三の意義に於ける農業でなければならぬように進化して來たのである。

第二の意義に於けるが如き企業としての農業が發達するに於ては勿論ソレに従つて農業の經營法を改め、古風の呑氣なる行なりばつたりの仕方では到底いけないのであつて、先づ第一に完全なる簿記法には據らないまでも兎に角、支出入の計算を明確に記入し得らるゝだけの帳簿を整頓し、取分け生産費の勘定などは精細の注意を拂つて損益を明かにせねばならないのであるが、是等の事は農業がソレより又益々進歩して第三の意義を實現し、商業的農業となるに及んでは尙更ら重大の問題であつて、計算の明確なると否らざるゝが、事業の成敗を決する要件の一つであることは固より論を待たないのである。農業を一つの營利的企業とし

て經營するに於て、常に最も多大の困難を感ずるのは、農家の家計に屬する勘定と、事業に屬する計算との區別であつて、此の區別を精確にして掛らざれば事業(農業)上に何程の利潤があつたか、損失があつたか、實は分らない筈である、現今我が國の小作問題に付き、地主小作人雙方互に自分の側を悲觀し、イヤ何程の損失である、イヤこんな事では引合はないなど、各々勝手の主張をなしつゝ、あるも、其實彼等は雙方共に行成り、バツタリの目の子算用で、ソウ云つて居るだけのことであつて、多くの農家では家計と事業とを區別した帳簿の一つをも具備して居らないやうな埒もなき有様なれば、得か損か、引合ふか、引合はないか、ソんな事が分らう筈もなく、兎に角地主でも小作人でも、共に不平を唱へつゝ、ドウなりコウなり、飢へもしないで食つて行く所を見れば、何れも泣事を云ふ程の事もなからうと信ずるより外に致し方はないのである。故に農業を一つの企業として考へ、農民は最早單純なる自家用の食料を生産する者にあらずして、何れも立派なる事業經營者(Business manager)であつて、都會に於て商工業を營みつゝある企業家と、同一の經營法に依つて事業に従事し、彼等と少しも異ならざる責任の下に行動する者と認めらるゝ以上は、何

はさて措き、必要の帳簿ぐらゐは備へ置きて、損得の計算が正確に判明する様に爲さざる可らざるは余の辯を待たざる所である。

次に商業的農業時代の農民は、矢張商人と同じく、少しの油断もなく、眼を八方に配つて、内外經濟界の趨勢を明かにし、常に米穀の相場のみならず、其他一般の商況などにも、殊に注意を怠らぬようにし、都會に於ける商工と全然同一の心掛けで居らねばならないのである。第一の意義に於ける古風の農業時代に於ては農民は極めて呑氣であつて、商人の様に齷齪して銖銖の利益を争ふが如きは自分等には到底出來ないことゝ諦め、ソレが質朴であるとか、律儀であるとか。云なれて、世上には大に稱美せられたのである。故に今我が國の農民に於て斯くの如き質朴律義の好評を博し、金儲けのことなどは少しも考へないと云ふならば、農村の不振とか、糜爛とかを叫ぶの必要はないのである。都會の商工がドンな生活をしようが如何なる贅澤をしようが、彼は彼、我は我である。極め込んで、單に舊式の穀作農業のみを勵んで居ることが可能であるならば、今日ほど氣樂な農村はないであらう。眞面目に稼いで居る農民なれば、低利の資金は容易に借りられ、善良なる種子

や肥料は望み次第手近かに得られ、公租の負擔は重いと云ふものゝ、徳川時代の如き無法無理の培克に遇ふの患もなく、地主が徒らに横暴を極めて勝手に小作地を取上げたり、又契約以外に小作料を引上げたりするような場合も屢々之れありとも思はれず、之に加ふるに昔時一般に最も恐ろしかつた饑饉など、今我が内地に於ては實際殆んど絶無と云つても過言にあらざるべく、又萬一不可抗力の天災などが或る一地方に行はるゝことありても、今日の國家に於ては、夫れ〱之を救済するの機關も備はり居れば、農民が自給自足の原始農業時代の様な生活程度で満足して都會の商工業者などを羨むやむようの事がなかつたならば、今日ほど安全で氣樂なことはないのであらう。然るにソレが出來ないで商工と同じように、二十世紀の恩澤に均沾し、少しは家らしき立派な家に住ひ、甘い物を食ひ、美なる衣服を着、時々は娛樂場へも出入して見たい、妻子達の智識欲や、虛榮心も或る程度までは満足をさせてやり度ひと云ふ様な欲望が次第に發達した以上は、先き立つものは金であつて、金がなければ其の目的を達することが出來ないのであるから、矢張商工業者と同じ様に金儲けと云ふことが必要となるのである。金儲けの必要を痛

切に感ずれば感ずるほど、愈々益々農業と商工業との接觸を密ならしむるに至るべきは、當然の結果であらう。

一體世人の想像では都會に住んで居る商工業者は、働らく時間は少なく、左したる勤勞にも服せずして、儲けの割合は農民より多ひと云つて、商工業者の生活は比較的甚だ樂であると思つて居る者は少なくないが、ソレは全く妄想であつて、商工業者の中でも、其の事業に成功して、外間より羨望されるゝが如き身代とならんとすれば、ソレは中々容易のことではなく、前にも述べた通り、常に四方八方に目配つて、如才なく立廻り、賣買の掛引、相場の變動、流行の趨勢、得意の氣受、商品の撰擇を始めとし、其他何にや彼と氣を遣ひ、心を勞することは、農民に比して幾十倍なるや分らないであらう。農民は勿論體力を勞し、四支を勞すること多大なるも、ソレとて年が年中、休みなく働らくの必要もなく、唯だ其の忙はしきは農繁期だけのことに止るのであつて、而かもその期間ですら、精神を勞することは甚だ少なくないのである。故に商工業者に儲けの多いと云ふは、其の心身の勤勞に對する報酬であつて、必ずしも安樂に遊んで居つて濡手に粟の儲をして居る譯でもないのである。尤

も都會の商工業者の中には、田舎の大地主など、同じ様に寝て居て巨額の收入ある大金持は勿論之れあるべく、又小商人小工業者にても不眞面目なる投機的の事業を試みて、一時に巨額の奇利を博するものも少なしとなさざるも、コレ等は千百人中たまたまある幸運者であつて、而かも一般に人々の收入を平均して見れば、矢張りあまり大した儲でもなく、二ヶ月も三ヶ月も、一文半錢の收入もなくして、四壁蕭然と貧をかこちて居る者が多數を占めて居るのである。然らば都會の商工業者が田舎の農民より儲の多いように見ゆるのは、畢竟彼等は比較的餘計に稼ぎ餘計に苦しみつゝある結果であつて、生活が思ひの外樂でなくして、苦みが多いから随つて儲も多いのである、今若し農民が商工等と同じ様〇儲を爲さんとすれば、又同様にソレだけの勞苦をせねばならないことは明白である。

ソコで農業が第三の意義に於ける近世的の農業となり、其の經營の方式販賣法等悉く企業化し、進んで又商業化するに於ては、農家には商工と同じく多大の儲もあるべく、贅澤の家には生活もなし得べくして、眞に二十世紀の文化の恩澤に均沾し得らるゝのである、然し其の代はりには田舎の呑氣な生活は出來ず、商工と同じ

様に年がら年中、あくせくとして働いて居らねばならないのである。田舎に居つて安全なる呑氣の生活をなし、相場がドウだの、流行がドウだの、商賣駆引がどうであるとか、種々煩はしき生活を一切謝絶して居つて、氣樂に都會の商工と同じ様の儲をしようとするのは、無理の注文であると言はねばなるまい。由來經濟的理法はソんな我儘もの、勝手に左右することは出來ないものと心得ねばならないのである。

較差地代と絶對地代 (下)

小泉 信 三

下 篇

(一)

Marxに從へば、地代は最も古い餘剩價值形態であつて、資本的生產方法發生以前に於ては正常なる餘剩價值形態は地代で、利潤は僅に從たる、偶發的のものたるに過ぎぬ地位を占めてゐた。然るに資本的生產方法が發生して農業にも侵入するに至つて、此の主従の位置は顛倒せらるゝに至つた。然し乍ら、資本的生產方法の下に於て地代を決定するものは、前代の利潤に於けるが如き偶發の事情ではなくて、それは優に理論的討究の對象たるに堪ふるものである(Theorien, II 2 150. Kapital III 323-336)。さて此の理論的討究に於て既往の最も卓越せるものは、いふ迄もなく Ricardoであるから、Marx自身の地代論も、勢ひ Ricardo批評の形に於て演述せられ